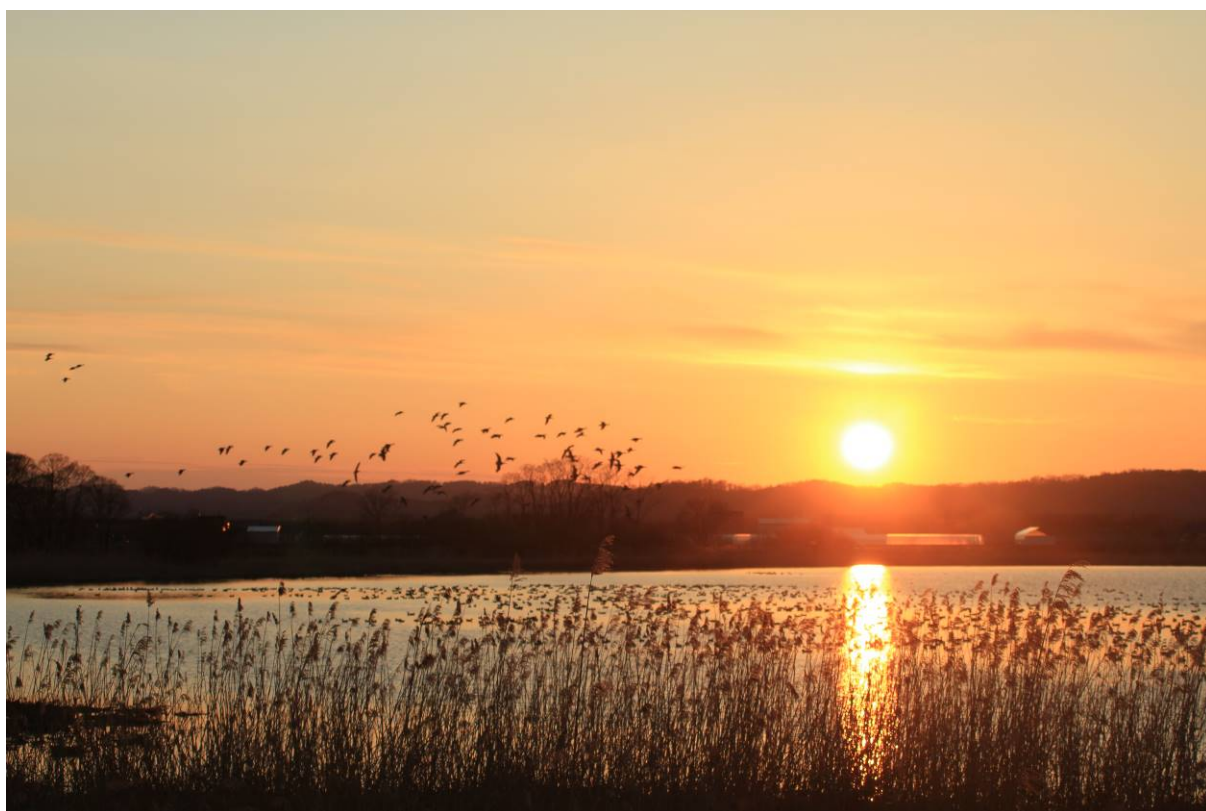


【素案】

宮島沼保全活用計画

(第3期計画)



美唄市

(令和4年度～令和13年度)

もくじ

1 はじめに	1
2 計画策定の趣旨等	
(1) 計画策定の趣旨・目的	2
(2) 計画の位置づけ	2
(3) 計画の期間	3
3 宮島沼に係る現況と課題	
(1) 宮島沼の概要	4
(2) 生態学的特長	4
(3) 宮島沼における課題	5
(4) 宮島沼に関わる団体・施設と活動内容	5
4 第2期計画の取組内容の評価と課題	
(1) 第2期計画の取組内容と評価	8
(2) 第3期計画に向けた改善	9
5 第3期計画	
(1) 計画の目標	10
(2) 計画の内容	10
6 計画の進行管理	
(1) 推進体制	13
(2) 進行管理	13
(3) 計画の見直し	13
参考資料	
資料1 第2期計画の取組内容と評価の一覧	14
資料2 マガン飛来数	20
資料3 宮島沼水鳥・湿地センター来館者数	22
資料4 宮島沼における保全活用の取組の主催者別参加者数	22
資料5 用語解説	23

1 はじめに

宮島沼は、札幌市の北東約 50km の美唄市西部に位置し、田畑に周囲を囲まれた面積約 41ha の淡水湖です。毎年、春と秋にマガンやハクチョウ、ガンなどが飛来しており、渡り鳥にとって重要な中継地となっています。このため、水鳥の生息地等として国際的に重要な湿地として、平成 14 年 11 月 18 日、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約(通称:ラムサール条約)」に登録されました。

本市においては、「ともに支え合い 分かち合う 田園文化創造都市 びばい」を都市像として、「ともに支え合い、安心して暮らせるまちづくり/地域資源を生かした「にぎわい」と「活力」あふれるまちづくり/地域に根ざし、暮らしに学ぶまちづくり/人と自然が共生した安全・安心のまちづくり/市民が主役の誰もが活躍できるまちづくり」の 5 つの挑戦と 13 の重点施策を据えた「第 7 期美唄市総合計画」を令和 3 年度からスタートさせ、市民一人ひとりを主役として、誰ひとり置き去りにしないまちづくりを目指しています。

宮島沼においては、国際的にも貴重な宮島沼の保全と活用をバランスよく両立させ、将来にわたって継承していくことを目的として、平成 14 年に「宮島沼保全活用計画」を策定し、平成 24 年には第 1 期の計画期間終了に伴い、第 2 期計画を策定しました。

このたび、第 2 期の計画期間が終了したため、計画の進捗状況を総括するとともに、宮島沼における課題の解決に向けて、第 3 期計画を策定しました。

今後の施策の実現に向けては、国や道、市などの行政による取組だけでは自ずと限界があり、行政と市民及び関係団体などが一体となる地域を挙げた取組を進めることが引き続き大切になります。

この計画の策定を契機として、自然環境に対する保全活動への理解を一層深めるとともに、宮島沼を私たちの身近な生活やまちづくりに活用し、共通の認識、情報の共有を進めながら、国内はもとより国際的にも誇れる「豊かな自然と親しみ共生し、未来に継承するまち」を市民の皆さんとともに一歩ずつ築き上げていきたいと考えています。

終わりに、計画策定に当たり貴重なご意見、ご提言をいただきました市民の皆さんをはじめ、関係機関・団体の皆さまに心からお礼を申し上げますとともに、今後ますますのご支援とご協力をお願い申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

美唄市長 板 東 知 文

2 計画策定の趣旨等

(1) 計画策定の趣旨・目的

宮島沼は、国の天然記念物のマガンが毎年春と秋に最大 8 万羽も飛来する、世界でも有数の水鳥の渡来地であり、ラムサール条約における国際的に重要な湿地に登録された美唄市が誇る大切な自然資源です。

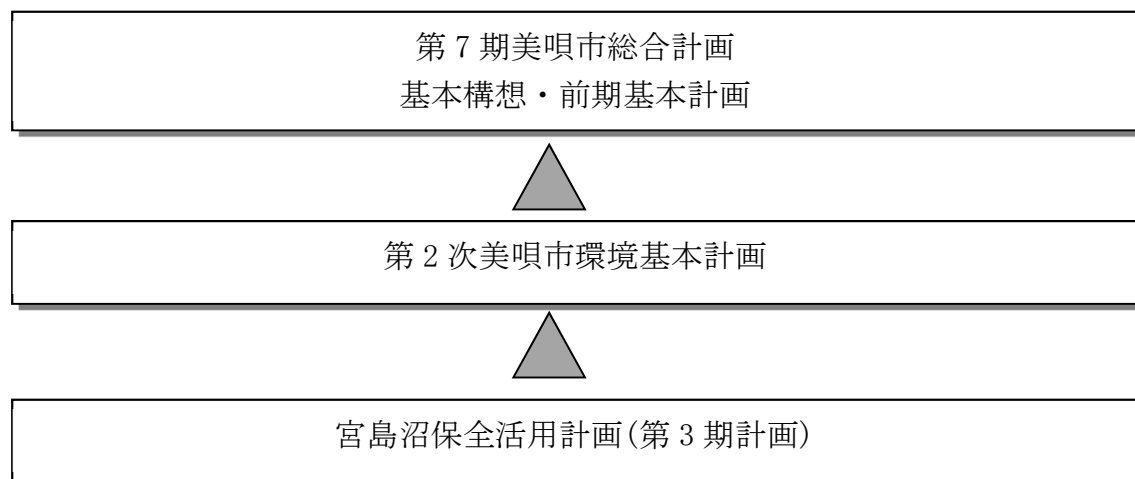
美唄の誇りである宮島沼を将来にわたって引き継いでいくためには、「保全」と「賢明な利用(Wise Use)」という 2 つの視点が必要です。保全とは、宮島沼の水質・周辺環境や生態系などを良好な状態に保つことです。賢明な利用とは、健全な湿地から得られる恵みを持続可能な形で利用することです。観光や農業などの産業での利用はもちろんのこと、憩いや遊び、学びの場としての文化的な利用も当てはまります。健全な生態系を保全し、様々な形で持続的に活用することで、宮島沼を将来にわたって守り育てていくことが可能となります。

これらをうまく実行するために、この「宮島沼保全活用計画(第 3 期計画)」を策定しました。

宮島沼の保全と賢明な利用を通じて、国際的に重要な自然を守り育み、美唄の新しい価値を創造していくことは、将来の美唄にとって大きな意義があります。

(2) 計画の位置づけ

計画の体系は、市の総合計画として「第 7 期美唄市総合計画」(以下「総合計画」という。)、中間計画として「第 2 次美唄市環境基本計画」があります。「総合計画」の基本構想には 13 の重点施策があり、そのうちの 1 つの『豊かな自然環境の保全と共生』における施策として『自然保護』を定め、また、「総合計画」の前期基本計画における施策の方策として、『宮島沼の保全と活用』を位置付けています。



第7期美唄市総合計画

□豊かな自然環境の保全と共生 (18) 自然保護 より抜粋

課題

1 宮島沼の保全と活用

宮島沼は、水質の富栄養化や水面積の縮小が進行するとともに、水深が浅くなっているため、沼の浚渫(しゅんせつ)を実施するなどして良好な環境を保護していかなければ、その豊かな自然が失われてしまう懸念があります。

また、春にはマガンによる小麦の食害が発生しており、被害調査や代替採食地の設置等、効果的な防除方法の検証や広域的な対策が必要です。

(中略)

施策の方向

1 宮島沼の保全と活用

宮島沼水鳥・湿地センターを拠点として、地域住民や関係機関と連携し、子どもたちが、自然の大切さを実感し、身近に自然と親しむことができるよう、イベントの開催や、ふゆみずたんぼなど環境学習会を推進します。

また、宮島沼と周辺の湖沼群、周囲の農地が国の「生物多様性保全上重要な里地里山」の一つに選定されたことから、マガン等が飛来する環境を保全するため、ワイズユースを推進していくとともに、宮島沼の湿地環境を維持するため、水環境の改善に向けた取組のほか、自然環境保全や生物多様性に配慮した活動を進めます。

(後略)

なお、火急の課題となっていた宮島沼の水環境の悪化に対応するため、美唄市が主催した専門家や関連機関・団体による「宮島沼の水環境の保全と再生に関する検討会議」の提案に基づき、平成30年に「宮島沼の保全と再生に関するマスタープラン(通称:みやぷら)」(以下「マスタープラン」という。)を策定しました。「マスタープラン」は、宮島沼が抱える課題の解決に向けて、全ての関係者が共有する協働取組の指針として第2期計画を補完するものでしたが、第3期計画では、「マスタープラン」を融合した総合的な計画づくりを目指しました。

(3) 計画の期間

計画期間は、令和4年度から令和13年度までの10年間とします。

ただし、「総合計画」における後期基本計画の策定や、宮島沼を取り巻く環境について、大きな変化が予見される場合は、早めに計画を見直します。

3 宮島沼に係る現況と課題

(1) 宮島沼の概要

名称：宮島沼

位置：北緯 43 度 20 分、東経 141 度 43 分

標高：13 メートル

面積：41 ヘクタール

保護制度：国指定鳥獣保護区特別保護地区

ラムサール条約登録：平成 14 年 11 月



(2) 生態学的特長

① 鳥類

宮島沼に飛来する鳥類は、48 科 217 種が確認されています(令和 2 年度国指定宮島沼鳥獣保護区自然環境インベントリー調査業務報告書・用語解説 1)。その中で、代表的な種が国の天然記念物に指定されているマガンです。マガンの全国の飛来数は約 20 万羽であり、そのうち半数近くの 8～9 万羽が宮島沼に飛来します。ハクチョウは、オオハクチョウが数百羽、コハクチョウが数千羽飛来します。カモ類については、オナガガモ、マガモ、コガモ、キンクロハジロなどが確認されています。このうち、環境省又は北海道のレッドデータブック(用語解説 2)に掲載されている希少種は、カリガネ、ハクガン、シジュウカラガン、ヒシクイ、オジロワシ、チュウヒ、ハヤブサなど 47 種です。

② 魚類

魚類は、8 科 19 種が確認されています(令和 2 年度国指定宮島沼鳥獣保護区自然環境インベントリー調査業務報告書)。このうち、環境省又は北海道のレッドデータブックに掲載されている希少種は、エゾウグイ、エゾホトケドジョウなど 5 種が確認されています。また、外来種は 8 種が確認されており、「生態系被害防止外来種リスト」に掲載されている種はタイリクバラタナゴの 1 種です。

③ 昆虫

昆虫類は、75 科 256 種が確認されています(令和 2 年度国指定宮島沼鳥獣保護区自然環境インベントリー調査業務報告書)。このうち、環境省又は北海道のレッドデータブックに掲載されている希少種は、ゲンゴロウ、コオイムシ、エゾコガムシなど 10 種が確認されています。宮島沼では昆虫類の調査が非常に限られており、記載されていない種も多くいると思われます。

④ 植物

植物は宮島沼では100科343種、近接する防風林や耕地も含めると108科498種が確認されています(令和2年度国指定宮島沼鳥獣保護区自然環境インベントリー調査業務報告書)。このうち、環境省又は北海道のレッドデータブックに掲載されている希少種は、チョウジソウ、オオバタチツボスミレ、クロユリ、クロバナハンシヨウヅルなど19種が確認されています。外来種も多く、北海道ブルーリスト(2010・用語解説3)に掲載されている種は108種にもなります。富栄養化と乾燥化などの環境変化の影響から、かつて記録された湿原や泥炭池沼に特徴的な種の多くはすでに絶滅してしまっています。

(3) 宮島沼における課題

宮島沼は渡り鳥の国際的に重要な飛来地であるとともに、かつて石狩川流域に広がっていた石狩湿原の面影を現在に残す貴重な自然遺産です。しかし、宮島沼は、マガンによる小麦食害と湿地環境の悪化という2つの大きな課題を抱えており、宮島沼の価値を高め、賢明な利用を推進していくためには、その解決が不可欠となっています。

宮島沼に飛来するマガンやハクチョウなどの多くの水鳥は、周辺に広がる田んぼの落ち粃を食べて渡りに備えます。宮島沼に多くの水鳥が飛来するのは、地域の農業の支えがあってこそと言えますが、田んぼの落ち粃が少なくなるとマガンは成長途中の小麦の葉を食害するようになり、地域農業との軋轢が生じています。

また、マガンやハクチョウのねぐらとなっている宮島沼ですが、年々水面積が縮小し、浅底化が進んでいます。かつては水草が繁茂し透明だった水質も、今では栄養分が過剰に蓄積された過栄養状態にあり、アオコが優占してしまっています。このことで、すでに多くの生きものが宮島沼から絶滅してしまったと考えられますが、将来的にはマガンやハクチョウの飛来地としての機能も果たせなくなると考えられます。

この他、マガンの飛来期に来訪者が農地・農道に侵入するなど、地域農業者への迷惑や水鳥へのストレスとなる行為も宮島沼の課題となっています。

(4) 宮島沼に関わる団体・施設と活動内容

① 宮島沼の会

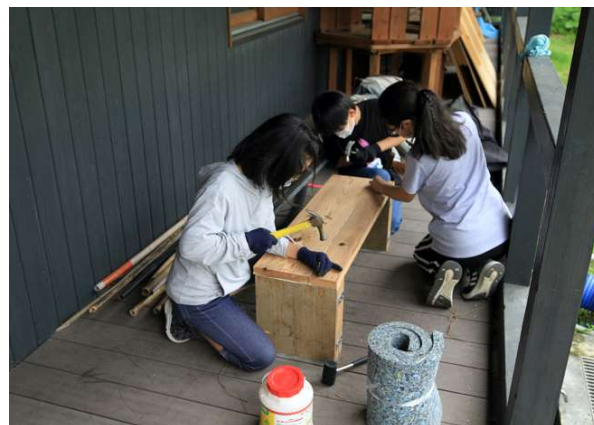
宮島沼の会は、宮島沼の保全と賢明な利用の推進のため、平成15年3月に発足した市民団体で、環境保全と環境整備活動、調査活動、普及啓発活動を実施しています。毎年4月下旬には「みんなでマガンを数える会」にてマガンのカウント調査を行っており、公式なデータとして蓄積されています。

自然戦隊マガレンジャーは、市内小中学生による子どもグループで、宮島沼での生

き物調査や自然観察、来館者向けの解説プログラム作りなどを行っています。自らが年間の活動計画を考え、実行する自主的なグループで、宮島沼の会のサポートのもとで活発な活動を展開しています。



みんなでマガンを数える会



観察小屋のイスづくり(マガレンジャー)

② 宮島沼プロジェクトチーム

宮島沼プロジェクトチームは、宮島沼のラムサール登録に関わる地域課題の検討のため、平成9年に発足した地域住民を主体とする団体です。現在は、農業体験や農村体験イベントなど宮島沼と地域農業の調和を推進するための活動を行っています。

宮島沼のラムサール条約登録 10 周年記念イベントとして始まった「宮島沼カントリーフェス」は、農と食、環境の交流を目的に、ゲーム大会や農産物の直売店、軽食や加工品も楽しめる手作り農業祭として継続して実施されており、600 名を超える方が参加する地域に根付いたイベントとなっています。



田んぼオーナーによる田植え



宮島沼カントリーフェス

③ 宮島沼水鳥・湿地センター

平成 19 年にオープンした宮島沼水鳥・湿地センターは、美唄市が管理運営に携わる環境省の施設です。宮島沼の保全と賢明な利用の中核施設として、自然解説や自然体験イベントを実施し、渡り鳥のモニタリング活動などを行っています。その活動内容は、年 1 回開催される宮島沼水鳥・湿地センター運営協議会にて検討されています。

④ ラムサール条約登録湿地関係市町村会議

日本のラムサール登録湿地を有する 70 市区町村により構成され、年 1 回主管者会議及び学習交流会の開催、ホームページによる各湿地の最新情報の発信を行っています。

4 第2期計画の取組内容の評価と課題

(1) 第2期計画の取組内容と評価

第2期計画では、自然、農業、観光、人・教育という4つの分野について、11の中施策と34の小施策の推進を図りました(資料1)。これらについて「宮島沼保全活用計画庁内推進会議」で評価を実施したところ、何らかの形で進展のあった小施策数は30となり、「マスタープラン」の作成など目標達成に至った小施策があった一方、宮島沼のワイズユースと噛み合った観光の在り方など、目標達成に至らなかった小施策もあり、それぞれ課題が残りました。

自然分野においては、宮島沼の水環境の改善(小施策4)が火急の課題となり、モニタリングや専門家の調査研究(小施策2、3)の成果に基づいて、必要な方策を「マスタープラン」にまとめることができました。「マスタープラン」には、宮島沼と石狩川の連続性に配慮した取組(小施策7)も含まれており、それぞれの取組を着実に実践していくことが今後の課題となります。トノサマガエルやオオアワダチソウなど外来生物の防除(小施策5)とヨシ等の再生管理(小施策6)に関しては、宮島沼の会などの取組で一部実施することができましたが、確実な成果につなげるにはこれからも努力と工夫が必要です。ラムサール条約湿地の指定区域拡大(小施策1)については、マガンによる小麦食害問題などの地域課題の解決を優先するべきと考え、検討を見送りました。

農業分野においては、小麦食害対策の充実に関する小施策(8～11)をそれぞれ推進することができましたが、小麦食害問題の根本的な解決にはまだ至っていません。マガンと地域農業の共生については、「マスタープラン」にも目指すべき方向性を整理しましたが、今後は持続可能な形で、広域的かつ計画的な食害対策を実施することが必要となります。その他には、グリーンツーリズム(小施策13)と関係機関との連携(小施策15)を一部進めることができましたが、農産物の付加価値化(小施策12)と付加価値分の一部を宮島沼の保全事業等に使用する(小施策14)取組については大きな進展がありませんでした。これらについては、今後、小麦食害問題の根本的な解決を図る中で検討していければと考えています。

観光分野においては、フットパスのイベントなど周辺環境を活かした取組(小施策16)を実施することができましたが、マガンの飛来最盛期におけるオーバーユース(用語解説4)の課題を解決することはできませんでした。宮島沼へのアプローチの改善については、誘導看板の設置や情報提供などの小施策(18～20)を実施しましたが、自家用車以外の交通手段の確保(小施策17)については、ニーズが少なく実施することができませんでした。新しい視点での観光を展開するための小施策(21～24)についてもそれぞれ取組を推進しましたが、大きな進展をもたらすことができませんでした。今後は、宮島沼の保全と賢明な利用と噛み合った観光の在り方について改めてビジョンを整理し、戦略的に取組を進める必要があると考えられます。

人・教育分野においては、研究者のための研究環境の充実(小施策 25)は効果的に進めることができましたが、学術研究助成制度の創設(小施策 26)については財源上の課題もあり、進展がありませんでした。環境教育の推進に関する小施策(27～30)については、市内小中学校の体験学習の受入れなどそれぞれ取組を進めましたが、体系的な環境学習プログラムの整備(小施策 31)については、予定していた事業が新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から中止となり、実現できませんでした。市民による推進体制確立の小施策(32～34)についてもそれぞれ取組を進めましたが、連携先の拡充や連携の強化など課題が残りました。

(2) 第3期計画に向けた改善

第3期計画では、第2期計画期間中に策定した「マスタープラン」と目標や取組内容を合致させるよう、施策の体系を整理します。その際、第2期計画の小施策を戦略的に統廃合し、簡潔で合理的な構成に組み替えます。また、第2期計画を通じて着手できなかった項目(ラムサール条約湿地の指定区域拡大、学術研究助成制度の創設等)については、その根拠は踏まえつつ、現状では必要性が低いものと考え、第3期計画への登載は見送るものとします。

5 第3期計画

(1) 計画の目標

第3期計画では、計画の目的である「宮島沼の保全と賢明な利用」を達成するため、以下の3つの目標を定めました。

目標1 宮島沼の保全とモニタリング

宮島沼の健全な湿地環境を再生し、渡り鳥の生息地として将来に引き継ぐために、宮島沼の保全再生に関わる取組を進めるとともに、必要な調査研究を推進します。

目標2 宮島沼を活用した地域づくり

宮島沼を地域で守り育みながら将来に引き継ぐために、宮島沼と地域社会における課題を発展的に解決し、宮島沼の多面的な価値を観光や教育に活用する取組を進めます。

目標3 湿地と人のネットワークづくり

上記の目標を効果的に進めるため、宮島沼周辺の自然資源を有効に活用するとともに、関係団体等との連携を深め、協働取組を実施します。

(2) 計画の内容

第3期計画の3つの目標を達成するために、7つの分野における14の施策を定め、それぞれの取組を進めます。

目標1 宮島沼の保全とモニタリング

分野1) モニタリングと調査研究の推進

施策① 基礎的な環境調査の継続的实施

宮島沼の自然環境と生物相(用語解説5)の変化を継続的にモニタリングし、保全再生活動の評価と検討に活用します。モニタリング項目としては、宮島沼の水質、水面積、水深など物理的環境と、水鳥の飛来数や植生などの生物相について実施します。

施策② 専門家・研究者の支援

宮島沼をフィールドに、自然科学、社会科学的研究を実施する専門家や研究者を支援します。また、専門家や研究者と連携し、研究成果を宮島沼の保全再生活動や普及・教育活動に活用します。

分野 2) 宮島沼の保全と再生

施策③ 宮島沼の水環境の改善

富栄養化、水面の縮小と浅底化が進んでいる宮島沼の水環境を、1990 年以前の健全な状態に戻すため、水環境と生物相を適正に管理する方法を検討し、実現可能な保全再生の取組を進めます。

施策④ 健全な生態系の創出

トノサマガエルなどの外来種や問題種を抑制しながら、宮島沼でかつて見られた生物相を復元する方法を検討し、実現可能な保全再生の取組を進めます。

目標 2 宮島沼を活用した地域づくり

分野 3) 地域農業との共生

施策⑤ マガンによる小麦食害対策の推進

代替採食地の設置や効率的な追い払いなど、効果的な小麦食害対策を持続的に実施する方法を検討し、小麦食害対策の取組を進めます。

施策⑥ 宮島沼ブランドの確立

宮島沼の特色を活かした自然共生型の農業の取組に対し、農産物の付加価値化や6次産業化を積極的に進めることで、地域に経済的な利益をもたらす方法を検討します。

分野 4) 観光・教育への活用

施策⑦ 観光への活用

宮島沼を訪れる見学者へのサービスを高めつつ、地域住民や自然環境に悪影響となる観察マナーやオーバーユースに対応する取組を進めます。また、宮島沼の保全と地域共生につながるイベントやツアーを実施します。

施策⑧ 教育への活用

学校教育や社会教育を通じて、特に若い世代に向けて自然の魅力と価値を伝え、地域の自然を大切にし、環境共生社会を担う人材を育てるための環境教育プログラムを実践します。

施策⑨ 人材育成と普及啓発

宮島沼の保全と賢明な利用に対する理解を促進し、支援者を増やすため、ボランティアの育成や各種取組に関する普及啓発活動を進めます。

目標 3 湿地と人のネットワークづくり

分野 5) 湿地のネットワークづくり

施策⑩ 宮島沼周辺湿地の保全と活用

美唄市内の自然資源をつなぎ、全体的な価値を高めるため、美唄湿原など周辺湿地と湿地資源の保全再生と活用に関する検討を行います。

分野 6) 人のネットワークづくり

施策⑪ 市民・関係団体との連携と協働

宮島沼に関わる市民、専門家、関係団体や機関との連携を強化し、宮島沼の保全と賢明な利用、環境課題と社会課題の解決に向けた協働取組を進めます。

施策⑫ 計画の共有と共同推進

宮島沼の現状と課題、目標とする将来像と必要な取組について、多くの市民や関係者と共有し、協力して計画を推進できるように体制を整えます。

分野 7) 宮島沼を核とした地域循環共生圏の創出

施策⑬ 地域循環共生圏づくりの創出

宮島沼の保全と賢明な利用を持続的に実践するため、人と地域、環境・社会・経済が有機的につながる「地域循環共生圏」（用語解説 6）の創生を目指します。

施策⑭ 宮島沼の保全と賢明な利用の推進体制の強化

宮島沼の保全と賢明な利用を推進する中核的な施設として宮島沼水鳥・湿地センターの機能を強化し、宮島沼の水環境の改善などの施策を実現するため、財源確保の方策として、クラウドファンディングや基金の設置等を検討します。

6 計画の進行管理

(1) 推進体制

美唄市の関係部署にて組織される「宮島沼保全活用計画庁内推進会議」において、進捗状況を確認することにより、互いに情報を共有し、改善します。

また、計画の推進に関わる関係団体等で構成される「宮島沼の保全と再生に関するマスタープランパートナー会議」や「宮島沼水鳥・湿地センター運営協議会」などの場においても進捗状況を確認し、計画の共同での推進を図ります。

(2) 進行管理

策定した計画を着実に推進するためには、PDCA サイクルを用います。つまり、保全活用計画を「Plan(策定)」し、これに基づいて事業を「Do(実行)」し、事業の実施状況を把握して内容を「Check(評価)」し、これを受けて計画を「Act(改善)」します。このサイクルは、1 年を基本単位として実行しますが、緊急性がある場合はこの限りではありません。

(3) 計画の見直し

計画期間は 10 年間としますが、自然環境や社会情勢の変化、技術革新などに適切に対応するため、計画期間にとらわれずに計画を見直します。

参考資料

資料 1 第 2 期計画の取組内容と評価の一覧

①基礎的な調査と制度を確立する

取組状況	3 期計画	上/実施状況 中/効果 下/課題
1 ラムサール条約湿地の指定区域拡大		
実施なし	なし	進捗なし
		－
		拡大を目指す根拠が現時点では希薄、地域の理解も不足
2 基礎的な環境調査の継続的实施		
実施中	継続	水鳥や水質は継続実施、魚類等に関しても一部実施
		長期観測データの活用、インベントリーの作成
		項目によっては実施が困難
3 データの分析や予測を専門家に依頼		
実施中	継続	基礎的な環境調査を推進する中で実施
		専門家との協働体制が構築できた
		項目によっては実施が困難

②宮島沼の環境を保全する

取組状況	3 期計画	上/実施状況 中/効果 下/課題
4 宮島沼の水環境を改善する		
実施中	継続	「マスタープラン」を作成し、部分的に推進
		水環境改善に向けた具体的な方向性を確立した
		浚渫等の実施が現状では困難
5 外来生物の防除による自然環境の保全		
実施中	継続	トノサマガエル等の駆除活動を一部実施
		モニタリングを継続中
		小規模実施では防除効果を得るのが困難
6 ヨシ等再生管理及び再生利用		
実施中	継続	マガレンジャーの活動としてヨシ紙を作成
		普及啓発効果があった
		小規模実施では保全効果を得るのが困難

③水鳥ランドを目指す

取組状況	3期計画	上/実施状況 中/効果 下/課題
7 宮島沼と石狩川との連続性に配慮した取組		
実施中	継続	気候変動適応北海道広域協議会に参画、岩見沢河川事務所と協働取組を実施
		宮島沼と石狩川の多面的機能向上に関する連携ができた
		「連続性」への考慮にまでは至っていない

④食害対策を充実する

取組状況	3 期計画	上/実施状況 中/効果 下/課題
8 食害対策制度の円滑な実施		
実施中	継続	防除資材の支援を実施
		農業者の継続的な利用状況から一定の効果は期待できた
		被害状況を大幅に改善できていないため新たな対策が必要
9 代替採食地調査の継続		
実施中	継続	地域と連携して実施
		マガンが代替採食地を利用しており、一定の効果はあった
		より効果的な代替採食地への誘導が必要
10 効果的かつ継続的な食害対策の研究		
実施中	継続	ドローンでマガンの追い払いの検証を実施
		代替採食地と組み合わせることで、効果を高められた
		人件費の負担が大きく、広範囲に実施するのは困難
11 国及び道による広域的な食害に対する取組		
実施中	継続	空知農業改良普及センターと連携して、マガンの追い払いなどの検証を実施
		連携することでより効果的な対策を進めることができた
		継続的な実施には地域との協議が必要

⑤宮島沼を守り育む農業の確立

取組状況	3期計画	上/実施状況 中/効果 下/課題
12 宮島沼ブランドの確立		
実施なし	継続	実施なし
		—

		地域ニーズの把握や、具体的な施策等の検討ができていない
13 観光客が農村に滞在する環境づくり		
実施中	継続	グリーンツーリズムの実施
		美唄産の農産物を身近に感じるとともに、農業について理解を深める
		地域ニーズの把握や、関係団体との連携体制ができていない
14 農作物売上げの一部をマガン保護に役立てる		
実施なし	継続	実施なし
		—
		地域ニーズの把握ができておらず、販売物の実績がない
15 農協や研究機関との連携		
実施中	継続	環境保全型農業の取組を農協や関係機関と連携して実施
		減肥・減農薬の取組により安全・安心な農産物を生産できた
		効果を高めるため多くの農業者の実施が必要

⑥宮島沼周辺の施設を整備する

取組状況	3期計画	上/実施状況 中/効果 下/課題
16 周辺環境を活かした見学場所の設定		
実施中	継続	フットパスイベントを実施した
		地域の自然と文化を活かした特色あるイベントができた
		マガン飛来時のオーバーユース対策ができていない

⑦宮島沼へのアプローチを改善する

取組状況	3 期計画	上/実施状況 中/効果 下/課題
17 自家用車以外の交通手段の確保		
実施なし	継続	実施なし
		－
		ニーズが少ない
18 バス停から宮島沼までのアクセス改善		
実施中	継続	ホームページにバス時刻表と宮島沼までのルートを掲載
		問合せに応えることができた
		マガンの観察に適したバスがない場合がある

19 ホームページによる情報提供		
実施中	継続	主に「MIYATOMO」（用語解説 7）で実施した
		特にマガン飛来期間中はアクセスが多く、情報提供ができた
		市のホームページは更新作業に手間がかかる。「MIYATOMO」はデザインやアクセシビリティの向上が必要
20 宮島沼までの誘導サインの充実		
実施中	継続	企業版ふるさと納税を活用し、誘導サインを更新した
		宮島沼への動線がわかりやすくなった
		迷う人の解消には至っていない

⑧新しい視点での観光を展開する

取組状況	3 期計画	上/実施状況 中/効果 下/課題
21 先進地の事例研究		
実施中	継続	情報収集に努めた
		—
		課題に沿った情報収集ととりまとめ、情報を活かす体制が必要
22 観光客のデータベースの作成		
実施中	継続	カントリーフェス等のイベント参加者のアンケートを実施
		折込チラシの配布先の検討などに利用
		データベースまでにはまとめられていない
23 地域資源の連携による観光		
実施中	継続	サイクルルートの整備を実施
		サイクルマップに掲載し自転車愛好家の利用者増
		滞在型観光の観光ルート等
24 観光情報を発信するセンター的機能の充実		
実施中	継続	周辺施設等の案内チラシなどを設置した
		周辺施設等の利用者がいた
		観光情報の共有が必要

⑨自然の保全を担う人材を育てる

取組状況	3 期計画	上/実施状況 中/効果 下/課題
25 研究者のための研究環境の充実		
実施中	継続	研究者への情報提供、調査協力などを実施
		重要な知見が得られた
		特になし、宿泊場所の提供ができれば理想的
26 学術研究助成制度の創設		
実施なし	なし	実施なし
		—
		財源の確保が困難

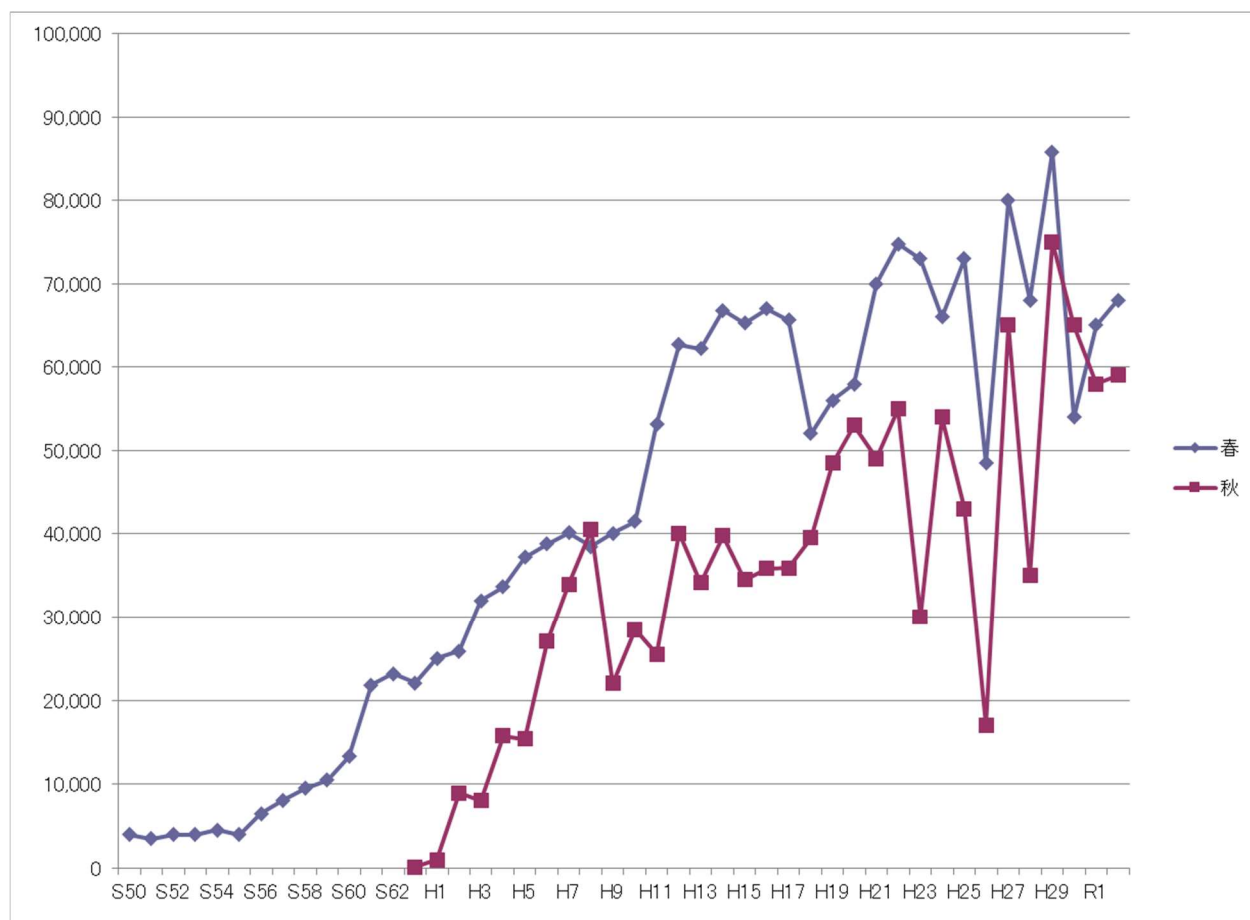
⑩環境教育を進める

取組状況	3 期計画	上/実施状況 中/効果 下/課題
27 学校教育や社会教育の実践		
実施中	継続	学校の受入れや講演活動など実施
		宮島沼への理解が得られた
		効果が見えづらい
28 環境教育を担う指導者や市民組織の育成		
実施中	継続	ボランティアの育成とコーディネートを実施した
		ボランティアが重要な役割を担った
		CSR 活動(用語解説 8)など裾野の拡充が必要
29 マガン越冬地等との共同プログラムを展開		
実施中	継続	北海道ラムサールネットワークなどとの協働事業を実施
		質の高いプログラムを実現し湿地間の連携体制も構築できた
		広く美唄市民を対象とした事業ができれば理想的
30 周辺環境を活用した環境教育の実践		
実施中	継続	防風林や田んぼをフィールドとして環境教育を実施
		質の高いプログラムを実施できた
		まだ対象が限定的
31 体系的なプログラムを整備		
実施なし	継続	新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から事業を中止
		—
		—

⑪市民による推進体制を確立する

取組状況	3 期計画	上/実施状況 中/効果 下/課題
32 民間団体の活動支援		
実施中	継続	宮島沼の会、宮島沼プロジェクトチーム等の事業に協力した
		質の高い事業を実施できた
		宮島沼の会の会員増など裾野の拡充が必要
33 農業団体や観光団体との連携		
実施中	継続	環境保全の取組を地域の農業団体と連携して実施した
		安全・安心な農産物の生産とともに、地域資源の保全管理ができた
		担い手農家の高齢化により地域活動の低下が懸念される
34 保全活用計画の推進体制を確立		
実施中	継続	宮島沼水鳥・湿地センターを中心に計画を推進した
		一部実施に至らない施策はあるものの、大半の施策を実施した
		毎年度の進捗管理等、体系的な推進体制の確立には至っていない

資料2 マガン飛来数



(単位：羽)

年	春	秋
S50	4,000	—
S51	3,500	—
S52	4,000	—
S53	4,000	—
S54	4,500	—
S55	4,000	—
S56	6,500	—
S57	8,100	—
S58	9,500	—
S59	10,500	—
S60	13,300	—
S61	21,835	—
S62	23,140	—

S63	22,061	132
H1	25,000	1,000
H2	25,870	8,950
H3	32,000	8,000
H4	33,650	15,720
H5	37,180	15,370
H6	38,770	27,000
H7	40,120	33,930
H8	38,490	40,520
H9	40,070	22,020
H10	41,470	28,410
H11	53,200	25,480
H12	62,700	40,080
H13	62,200	34,160
H14	66,800	39,750
H15	65,300	34,470
H16	67,000	35,860
H17	65,650	35,900
H18	52,000	39,510
H19	56,000	48,500
H20	58,000	53,000
H21	70,000	49,000
H22	74,750	55,000
H23	73,000	30,000
H24	66,000	54,000
H25	73,000	43,000
H26	48,500	17,000
H27	79,980	65,000
H28	68,000	35,000
H29	85,820	75,000
H30	54,000	65,000
R1	65,000	58,000
R2	68,000	59,000

調査：美唄市・東京大学・草野貞弘

資料 3 宮島沼水鳥・湿地センター来館者数

(単位：人)

H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
17,987	15,281	14,839	15,034	11,855	15,782	14,144	16,699	10,004

資料 4 宮島沼における保全活用の取組の主催者別参加者数

(単位：人)

	市主催	宮島沼の会 主催	宮島沼プロジェクトチーム主催	合計	
	主な取組： ボランティア講習、 年末交流会	主な取組： みんなでマガンを数 える会、マガレンジ ャーなど	主な取組： ふゆみずたんぼ、カ ントリーフェスなど		うち環境学 習会等参加 者数 ※1
H24	76	173	1,012	1,261	388
H25	53	187	598	838	517
H26	51	225	998	1,274	438
H27	38	236	910	1,184	494
H28	71	375	1,015	1,416	535
H29	39	199	749	987	522
H30	40	308	857	1,205	515
R1	37	279	953	1,269	580
R2 ※2	—	105	—	105	95

※1 たっぷり雁観会、みんなでマガンを数える会、ガイドウォーク(ぶらしっち)、マガレンジャーイベント、ふゆみずたんぼイベントの参加者数の合計

※2 令和2年度については、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、各種取組が大幅に縮小となった

資料 5 用語解説

No.	用語	初出ページ	解説
1	インベントリー	4 ページ	その地域に生息する動植物の一覧(「inventory」は「目録」の意)
2	レッドデータブック	4 ページ	レッドリスト(絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)に記載された種について生息状況等を取りまとめ編纂した書物
3	北海道ブルーリスト	5 ページ	野生生物が本来の移動能力を超えて、国外または国内の他地域から人為によって意図的・非意図的に導入された種、いわゆる「外来種」について、種ごとに導入された経緯や生態学的特性、その影響などを、北海道が取りまとめたもの (https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/alien/bluelist/bluelist_top.html)
4	オーバークース	8 ページ	来訪者の方たちによる、宮島沼の自然や周辺農地・農業者の営農活動等に影響を及ぼすような過剰利用
5	生物相	10 ページ	特定の地域に生息・生育する動植物の種類組成
6	地域循環共生圏	12 ページ	国の第五次環境基本計画(平成 30 年 4 月閣議決定)において、国連の「持続可能な開発目標」(SDGs)や「パリ協定」等を踏まえ提唱された考え方で、各地域が美しい自然景観等の地域資源を最大限活用しながら自立・分散型の社会を形成しつつ、地域の特性に応じて資源を補完し支え合うことにより、地域の活力が最大限に発揮されるよう目指すもの
7	「MIYATOMO」	17 ページ	宮島沼水鳥・湿地センターが運営する、宮島沼の水鳥、自然及び地域の応援団(ミヤトモ)の活動や、最新の自然情報等について発信する Web サイト (https://miyajimanuma.wixsite.com/miyatomo)
8	CSR 活動	18 ページ	企業が社会的責任を果たすために行う地域貢献等の活動

宮島沼保全活用計画(第3期計画)

美唄市

令和4年度～令和13年度

令和4年 月